

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修士論文概要

日本語学習者におけるイントネーションとパーソナリティ印象
—平坦上昇調を通して—

富岡泉

2014年3月

第1章 序章

第一章では、本研究の研究背景および研究目的について述べる。

本研究は、日本語学習者の平坦上昇調の使用に対する意識と、平坦上昇調の使用に対してするパーソナリティ印象を明らかにしたものである。文の頭から文末にかけてなだらかに上昇するイントネーション（以下、平坦上昇調）は、その使用意識や聞き手に与える印象に個人差があることから、(1) 聞き手が受け取る話者の印象が多様である、(2) その印象から話者のパーソナリティが判断される、(3) 使用する際には注意が必要であると言える。

戸田(2008)では、「人の印象はその音声的特徴で大きく変わる」ことが指摘されている。そのため、発話の際の音声的特徴は話し手の所属や性格を聞き手が判断する材料となる。平坦上昇調のように、ことばの使用意識に個人差がある場合、コミュニケーション上の有用性だけに着目しては発話者にとって自分の好ましくない印象や不快な思いを相手に与える可能性がある。また、このような危険性は、母語話者だけでなく日本語学習者にも同様に起こり得る問題であることが予想される。

日本語学習者は、聞き手に正しい情報を伝えられるだけでなく、その韻律特徴から自分にとって不本意な印象を聞き手に抱かせないようにすることの重要性についても考える必要がある。本研究では、「自分にとって不本意な印象を聞き手に抱かせない」に焦点を置き、平坦上昇調を通して日本語学習者の音声の韻律的特徴とパーソナリティ印象との関係について扱う。パーソナリティ印象とは、「音声によるパーソナリティ印象とは、音声から想起される話し手の人柄やパーソナリティの印象である」(内田 2009)。

本研究では、日本語学習者における平坦上昇調の現状について、(1) 日本語学習者は平坦上昇調の話し手に対してどのようなパーソナリティ印象を想起するのか、(2) 日本語学習者は平坦上昇調をどのように使用しているのか (3) 日本語学習者は平坦上昇調を産出できているのか、(4) 日本語学習者は平坦上昇調の話し手に対してどのような印象を持っているのか、の4つのことを明らかにする。そのために、以下の4つのリサーチクエスション（以下、RQ）を設ける。

RQ1：日本語学習者は平坦上昇調の話者のパーソナリティ印象をどう評価するのか

RQ2：日本語学習者は平坦上昇調を使用しているのか、使用していないのか

RQ3：日本語学習者は平坦上昇調をどのように産出するのか

RQ4：日本語学習者は平坦上昇調についてどのような印象を持つのか

第2章 先行研究

第2章では、先行研究について述べる。

日本語のイントネーションは、「アクセントの特徴の上に加わる声の高さの変化」(杉藤1990)である。定延(2004)によると、「話し手の気持ちが強ければ、アクセントを打ち消す」こともあり、イントネーションと話し手の気持ちの間には関連性が指摘されている。そのため、「発話の場、話し手の心理・意識、聞き手への反応など、他者とのコミュニケーションにとっては重要な言語技術」(中村・永淵2001)であると言える。内田(2009)によると「話者の性別や年齢に係る情報、さらに話し手の人柄や感情といった感情領域の情報」についても想起させることがあり、日本語のコミュニケーションにおいて気をつけるべき言語技術であることが指摘できる。本研究では、イントネーションから想起させる人柄やパーソナリティ(以下、パーソナリティ印象)である、「性格性情報—その人はどのような人柄なのか?—」(内田2006)を対象に調査を行った。

本研究の調査対象である平坦上昇調は、研究者や論文によって、その韻律特徴と名称が異なる。関東の若年層を中心に、飛躍的に使用数が増えている「とびはねイントネーション」(田中1993)をはじめ、「アクセント核破壊型音調」(蔡1996)、「平坦上昇調」(湧田2003)など、多様である。本研究では、富岡(2014)において確認されたイントネーションと、韻律特徴において最も共通点が多くみられる「平坦上昇調」の名称を用いることとする。

本研究によって平坦上昇調とその使用者のパーソナリティ印象を調査することで、現在、日本語学習者が平坦上昇調をどのような言語技術として捉えているかがわかる。これは、筆者の管見の及ぶ限り未だ明らかになっていない。

第3章 研究方法

第3章では、調査目的、調査協力者、調査方法、分析方法について述べる。各RQに沿って、以下の4つの調査を実施した。

調査①(質問紙調査、意識調査)

調査②(意識調査)

調査③(音声の産出調査)

調査④(意識調査)

調査①では、日本語学習者に20代から50代までの各年代の平坦上昇調の音声を聞いて

もらい、そのパーソナリティ印象に関する項目を回答してもらった。また、パーソナリティ印象と個人要因との関係性をみるため、質問紙回答後に半構造化インタビューを行った。調査②では、平坦上昇調の使用の有無について、日本語学習者がそれぞれどのように認識しているかを尋ねた。調査③では、平坦上昇調を使用すると認識している者は平坦上昇調の音声を、平坦上昇調を使用しないと認識している者は文末上昇調の音声を録音し、実際にどのように産出されているかを調べた。調査④では、日本語学習者が平坦上昇調の使用者の印象や、適切な使用場面をどのように考えているかを尋ねた。

質問紙調査の結果はエクセルおよび SPSS で、インタビューは文字化データとしてまとめた。

調査①と調査②の調査協力者は現在日本の大学に所属している日本語学習者 34 名である。調査③と調査④の調査協力者は、調査①から選出した 6 名である。6 名の詳細は以下の通りである。

調査協力者	性別	年代	母語	国籍
O さん	男性	20 代	ハンガリー語	ハンガリー
M さん	男性	20 代	英語	アメリカ
E さん	男性	20 代	スウェーデン語	スウェーデン
I さん	女性	30 代	英語	シンガポール
T さん	女性	20 代	中国語(台湾語)	中国(台湾)
J さん	女性	20 代	韓国	韓国

第 4 章 分析結果 I

第 4 章では、調査①の分析結果を述べる。

日本語母語話者の平坦上昇調の使用者のパーソナリティ印象には、話し手の年代間において差はみられなかった。20 代の「外向性」と「経験への開放性」および 30 代の「外向性」と「情緒不安定性」において有意差がみられた。また、その印象には、個人要因が関係していることがわかった。

第 5 章 分析結果 II

第 5 章では、調査②、調査③、調査④の分析結果を述べる。

調査②より、平坦上昇調を聞いたことがある日本語学習者には、自分は平坦上昇調を使

用すると認識している者と、平坦上昇調を使用しないと認識している者がいることがわかった。

調査③より、平坦上昇調を使用すると認識している調査協力者は、実際に平坦上昇調を産出していた。また、自分は平坦上昇調を使用しないと認識している調査協力者においても、平坦上昇調の産出が確認された。

調査④より、平坦上昇調を使用すると認識している日本語学習者は、平坦上昇調を意識的に使用している者と、無意識的に使用している者がいることがわかった。また、平坦上昇調を使用しないと認識している日本語学習者には、平坦上昇調を意識的に避用している者と、無意識的に避用している者がいることがわかった。

第6章 総合的考察と結論

第6章では、各調査の分析結果をもとに総合的考察、結論を述べる。さらに、本研究から日本語教育への示唆を記述する。最後に、今後の課題を述べる。ここでは、主に結論を述べることとする。

第一に、日本語学習者は、平坦上昇調の話し手のパーソナリティ印象を、次の3つの要因に基づいて判断していることが明らかになった。

- (1) 聞き手と話し手の[性別]に関する要因
- (2) 話し手の[年齢]に対する認識
- (3) 話し手の[社会的な役割]に対する認識

第二に、平坦上昇調を聞いたことがある日本語学習者の平坦上昇調の使用に関する自己認識と、実際に産出される韻律特徴について、以下のことが明らかになった。

- (1) 平坦上昇調の使用者であると認識する者
 - －認識と産出は一致している
- (2) 平坦上昇調の非使用者であると認識する者
 - －認識と産出は一致していない

さらに、上記の(1)(2)には、平坦上昇調の使用に対する意識が[有標]の場合と、[無標]の場合があることがわかった。

- [有標] ー平坦上昇調を場面に応じて使い分ける者
ー平坦上昇調を意識的に避用する者

[無標] ー平坦上昇調を場面に応じて使い分けていない者

ー平坦上昇調を無意識的に避用している者

まず、上記の「平坦上昇調を場面に応じて使い分ける者」について、以下の 4 点が明らかになった。

- ①平坦上昇調の使用者のパーソナリティ印象に対して自分なりの印象を持っている
- ②平坦上昇調の使用の有無により、聞き手に与える自分の印象が変わると考えている
- ③平坦上昇調の使用の有無を「聞き手との関係性」と「場所」によって判断している
- ④平坦上昇調の使用の有無をコミュニケーションのストラテジーとして捉えている

上記の「聞き手との関係性」は[親疎]と[立場]、「場所」は[改まり]の影響を受けることがわかった。

次に、「平坦上昇調を意識的に避用する者」については、「平坦上昇調を場面に応じて使い分ける者」と共通する次の 1 点が明らかになった。

- ①平坦上昇調の使用者のパーソナリティ印象に対して自分なりの印象を持っている。

また、「平坦上昇調を場面に応じて使い分けていない者」と「平坦上昇調を無意識的に避用している者」については、平坦上昇調の使用場面や想起される印象を語るための情報を持っていないことがわかった。

最後に、平坦上昇調の使用意識が[有標]の日本語学習者は、平坦上昇調の適切な使用場面および聞き手に与える印象を、現実のコミュニケーションを通して実践的に自ら学んでいるという実態が浮き彫りになった。

以上の調査結果を踏まえ、日本語教育への示唆を述べる。

(1) 平坦上昇調とその機能を学ぶことは、日本語学習者がそれぞれの、日本語でのコミュニケーションのあり方を考えるきっかけとなる。

(2) 平坦上昇調を使用するかどうかの選択および適切な使用場面の判断を可能にするために、日本語学習者が平坦上昇調の情報を得ることは重要である。

今後の課題として、以下の2点を挙げる。

第一に、個人要因の関係する平坦上昇調をどのように日本語学習者に伝えれば良いか、その適切な方法を明らかにする。

第二に、日本語学習者が平坦上昇調に関する情報を得た場合、それがどのような意識の変容に結びつくかを明らかにする。

これらを明らかにすることにより、日本語学習者が日本語で表現できる「自己」の幅が広がり、その結果、他者とのコミュニケーションがより豊かになると考える。

参考文献

- 内田照久 (2006) 「音声の中の F₀変動幅とパターンが話者のパーソナリティ印象に及ぼす影響」『信学技報』 pp.43-48
- (2009) 「音声の韻律的特徴と話者のパーソナリティ印象の関係性」『音声研究』第13巻第1号、pp.17-28
- 蔡雅芸 (1996) 「同意要求疑問文のアクセント核破壊型音調—「これ、面白くない？」について—」『東北大学文学部日本語学科論集』第6号、pp.35-46
- 定延利之 (2004) 「音声コミュニケーション教育の必要性和障害」『日本語教育』(123) 日本語教育学会
- 杉藤美代子編 (1990) 『講座 日本語と日本語教育 第3巻 日本語の音声・音韻 (下)』 明治書院
- 田中ゆかり(1993) 「とびはねインネーション」の使用とイメージ日本方言研究会第56回研究発表会発表原稿集
- 戸田貴子 (2008) 『日本語教育と音声』くろしお出版
- 富岡泉(2014) 「日本語学習者における平坦上昇調の使用意識」早稲田大学日本語教育学会 2014年春季大会ポスター発表
- 中村万里・永淵道彦 (2001) 『音声言語とコミュニケーション』 双文社出版
- 湧田美穂 (2003) 「「い形容詞+ナイ」の韻律的特徴：アクセント・イントネーション・持続時間の側面から」『早稲田大学日本語教育研究3』 pp. 125-139